状況の不確定性とパフォーマンスが作る認知の能動性
Cognition as Activity in Situative Uncertainty and Performativity

茂呂雄二[†]
Yuji Moro

[†]東京成徳大学
Tokyo Seitoku University
y-moro @tsu.ac.jp

概要

認知の能動性は，表象主義的内心プロセスではなく，むしろリアルな現実の状況で営まれる活動なしは実践であり，この実践／活動からは研究者も逃れることはできない．本稿では，このことを転換するエージェンシー論とパフォーマンス・アプローチにおける近年の展開に基づき議論して，①表象主義に基づく能動性問題そのものが解消されること，②能動性探求に実践的介入的治療的方法が有効となることを論じた．

キーワード：実践のユニティー，批判的認知研究，パフォーマティビティー，二重刺激法，転換のエージェンシー

1. 古典的状況論再訪

様々な状況論の展開の中で，初期古典的状況論は，状況依存性だと誤解・誤読されてきた．この誤解は，状況を行為（ないしは行為者）の背景のようにみなして，状況論の本来の意図に反して，二つを分離・距離化したことにある．この分離・距離化は，例えばブロンフェンブレナー流の生態学的環界のように，行為者を幾重にも取り囲む「同心円」で想定するものである．このようなメタファは理解しやすいが，L. Vygotsky に由来する，行為（主体）と状況のユニティーという状況論の最大の前提を無視するものである．

古典的状況論では，このユニティーが十分に咀嚼されなかったために誤解を許したとも言えるが，認知の能動性問題を通してユニティーの意味を再考すると，注目すべき記述を状況論の古典に見つけることができる．例えば Lave (1988)には，スーパーマーケットでの大人の計算研究には，買い物状況で実験者から与えられた問題が，被験者によって積極的に改変され，問題の意味が再構成される事例が示しされる．

この被験者による課題改変が意味するのは，認知の能動的特性だけでなく，認知が，行為者，対象，課題（メディア），生活などが構成する全体のユニティーとして，実践の中で実践を組織しながら展開する活動として捉えられるということだ．このとき能動性の座は内部から実践の場へと解放されるのである．

それでは，Suchman(1987)のプラニング・モデル批判は，能動性の視点から，どのようなユニティー理解をもたらすのだろうか．それは批判的認知研究とも言える視点であり，状況論のユニティーとは，ユニティーから研究者を除くことができないという主張である．Suchman の批判の中核は，認知研究者が囚われているプラニングモデルという「像＝イメージ」の批判にある．それは，認知研究の対象が，研究者自身の実践も含む歴史的で文化的なユニティーだとの視点をもたらす．

以上の①リアルな実践のユニティーとしての能動性，②このユニティーに研究者自身も含まれること，これら２点は，近年の状況論の議論において，さらに先鋭化されている．

2. 状況の不確定性

変革のエージェンシー：活動論は，近年，変化のエージェンシー(Transformational Agency)に議論を集中させている．もともと活動論は，個体を超えたシステムを具体的に描いてみせたが，学習による発達に関して，学習を新しい学習活動の創造（それによる発達）過程だと主張してきた．近年の議論は，活動の創造を社会変革も視野に入れて拡張したものだと言える．この拡張については関係的エージェンシー(relational agency, Edwards, 2017)，二重刺激法による転換のエージェンシー(transformative agency by double stimulation, Sannino, 2016)，転換的なアクティビスト・スタンス（transformative activist stance, Stetsenko, 2017），などの先鋭的提案が相次いでいる．

関係的エージェンシー：リアルな実践の場に能動性を発見する姿勢は，上記の複数の研究に共有されているが，Edwards(2017)は，いわゆる他職種・異職種連携というリアルな場が，活動の変化と人々が発揮するエージェンシーを作り出すと述べている．

例えば，教育現場の指導者教員と実習生が連携する場面は専門性の質が異なる人々間の異職種連携が必須な場面であり，エキスパートがノビスに教授する場面

ではなく，いかに相手の専門性の質を理解するかのエージェンシー（行為主体性）が発揮される場面であり，同時に周縁者のノビスは熟達性概念を変革する．

二重刺激課題事態：関係的エージェンシーを含めて，エージェンシーが発揮の場は，先のリアルな実践のユニティーであり，本来的に不確定事態の場である．

Sannino(2016)は，この不確定事態を二重刺激事態として解釈し、アクション・リサーチを開拓したクルト・レヴィンが考案し交流のあったヴィゴツキーが追試した「待ちの実験 waiting experiment」が二重刺激の典型事態だとする．実験室に呼んだ数名の被験者を部屋に置いたまま，実験者は用事があると言い退室してしまい，何の心理学実験も行われないままに被験者は放置される．被験者たちは，やがて話し合いを始め，どうにかしてこの事態を変化せようと「手段」になるものを見つけようと実験室を探索し始める．時計の針が 30 分になったら出ていこう，付箋に実験者宛のメモを残して出ていこうとの積極的な提案もなされ，膠着し意味を失った待ちぼうけ事態は，被験者たちのエージェンシー発揮によって突破される．状況は，被験者自身の行為によって転換されるのである．

Sannino は日常世界にあるさまざまな状況は，実はこのような二重刺激的だと述べて，ホームレスの若者の居住ユニットにおける，若者たちと，さまざまな職種の職員，他のステークホルダーたちとの，協働による居住ユニットの活動システムの転換過程が分析されている．

アクティビスト・スタンス：Stetsenko(2017)は，現状への適応の概念から，社会変革とアクティビズムの概念への視点のずらしを重視し，発達・学習は，世界の「所与」に適応することに限られない，アクティビスト的本性を伴う，共同的達成のスタンスで捉えるべきとする．

このスタンスは，現状の活動システムの実際を記述するのに止まらない，ある種の当為を含む，未来・将来も視野に収めた時間的なパースペクティブの主張となっている点で興味深い．このような時間論は，後述のパフォーマンスアプローチも含めて，知的活動の能動性を主張する状況論に共通している．

3. パフォーマティビティー

前述の変革のエージェンシー論に先立って人間の活動の能動性を主張してきた，パフォーマンス・アプローチ（Holzman, 2008; Newman & Holzman, 1996/2022）は，L. Vygotsky の発達的学習論に基づく点で，活動理論と同根であるが，そこに L. Wittgenstein の哲学批判と言語実践の観点を加味しているから，先述の Suchman による既存モデル批判の意味を理解する上でも重要である．

このアプローチのパフォーマンスとは，状況の不確定性のもとで人間が行う知的な行為は，知らないことにチャレンジするという先の見えない跳躍的行為となるという意味でのパフォーマティビティーを特徴とする理解である．このような能動性がすでに常に発揮されているとの理解を前提とするとき，認知研究者がすべきことは，認知行為者の発達と学習を支援する介入的実践となる．とくに，病理としての認知像を治療・治癒するというセラピューティクス的介入実践である．

我々は，実は意味を確定できない，あやふやなイメージとしての言語像・認識像（Wittgenstein, 1956）に囲まれている．Suchman がプラニングモデルという伝統的だが実はあやふやなモデルを批判することで，状況的行為の可能性を開いたように，病理をもたらす認知像を治療し癒しをもたらすアプローチ実践という認知研究を構想することができる（茂呂，印刷中）．

4. 認知の能動性の意味

これまでの議論から，表象主義に基づく能動性問題そのものが，これが解消されるといえる．内界・内心に能動性を仮定すれば，デウス・エクス・マキナーの密輸入となるが，これを解消し予防できるといえる．この方針に従うとき，認知研究の姿は他ならぬ病理からの解放を目指すセラピューティクス実践となるだろう．

5. 参照文献

[1] Edwards, A. (2017). *Working relationally in and across practices*. Cambridge U. P.

[2] Holzman, L. (2008). Vygotsky at work and play. Routledge. （茂呂雄二訳，遊ぶヴィゴツキー　新曜社）

[3] Lave, J. (1988). *Cognition in practice*. Cambridge U. P.（無藤隆他訳, 1995, 日常生活の認知行動　新曜社）

[4] 茂呂雄二（印刷中）．はじめてのパフォーマンスアプローチ　新曜社

[5] Newman, F. & Holzman, L. (1996). *Unscientific Psychology*. Praeger. （茂呂雄二他訳, 2023, パフォーマンス・アプローチ心理学　ひつじ書房）

[6] Sannino, A. (2016). Double stimulation in the waiting experiment with collectives: Testing a Vygotskian model of the emergence of volitional action. *Integrative Psychological and Behavioural Science,* 50(1), 142–173.

[7] Stetsenko, A. (2017). *The transformative mind*. Cambridge U.P.

[8] Suchman, L. (1987). *Plans and Situated Actions.* Cambridge U. P. （佐伯胖他訳, 1999, プランと状況的行為　産業図書）

[9] Wittgenstein, L. (1956). 哲学探求　藤本隆志訳　大修館